

掛け算九九

志村 良知

九九は大和時代に大陸から伝わり、奈良時代には数値表を使って実用化していたことが出土する木簡から判るといふ。その九九は、9の段から始まり、8の段は八八・六十四、7の段は七七・四十九から始まるという大きい数から小さい数への一方通行だったらしい。

現在は小学校二年で習い、一桁の自然数同士の掛け算の答を全方向に徹底的かつ一気に覚える。外国ではもっと大きな数まで習うのが普通で、ドイツ常用国では12の段は生活必需品だし、20の段まで行く国も珍しくない。インドのある地方では99の段迄あるという。しかし、教える・習うと身に付けるのは別で、結局一桁同志もおぼつかない、つまり九九の言えない大人は多いらしい。

5の段くらいまでは足し算で暗算できるが、6の段以上では掛け算を暗記するのが一番早い。世界の言語の大部分は、数詞が長く言い換えが困難なので、表を作り何年かかけて丸暗記する。それでもヨーロッパ言語では相当な難行になりそうである。フランス駐在時代、若い衆に九九を言わせてみななかったのは残念である。呪文のように覚える日本では三つ子の魂百迄、明治25年生まれのお婆様の得意の掛け声は「一二の三八・二十四」だった。

バルセロナ、ラスランブラスのカフェでの出来事。

泊まり出張の夕刻、スペインの詩人が「終わりが無ければよいのに」と詠ったプロムナードのカフェのテーブル。発泡ワインのカヴァのボトルもかなり空いた頃、相棒のフランス人が乗数に0がある4桁同志の掛け算の筆算を始めた。最初は普通だったが、0が現われるやその位を先頭に0を四つ並べ、次の位に移った。「ちょっと待て、その四つの0は何だ」と聞くと「0を掛けるから」と澄ましている。彼の頭の中では0の段というのが当たり前だったらしい。

$$\begin{array}{r} 3256 \\ \times 2302 \\ \hline 6512 \\ 0000 \\ 9768 \end{array}$$

教わったのか独自の工夫なのか、四つの0は強烈な印象で目に焼き付いてしまった。